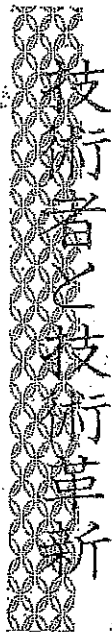


所

感

ソニー株式会社  
社長

井

深

大

「技術」とは何ぞやというはっきりとした定義づけは、たいへんむずかしい。単にむずかしいばかりでなく、時代とともにどんどん変化していることを考えなくてはなりません。古い考えの人には、技術ということばに昔の熟練工のやった名人芸の技を連想するでしょう。

そこまで古くなくとも、技術といえれば何か特殊技能で、その人でなくては持っていないものという感じをいただく人も多いようです。たしかに昔、すぐれた技術を持った人は、たいへんな努力と経験を重ねて、その人でなくては持ち得ない秘伝ともいべきものを築き上げ、それが技術として高く評価されてきました。

しかし、このように貴重だった技術も、今日の科学にかかると、何の秘密もなく解明されてしまう。

われわれがお互いに今持っている技術は、非常にレベルの高いものと考えがちですが、この技術の価値は世の中の進歩に従って、どんどんおし流されてしまうのです。技術の特権視した時代は、技術の進歩がもつともゆつくりしていた時代のことであり、もつとも進歩しない分野でのことです。

しかし、今日のように技術というものが、もつとも進歩している分野であればあるほど、技術はもつとも必要であり、同時に不安定なものということができます。

技術革新は技術革命ではありません。一度変化したら、しばらくそのままの状態が続くのではなく、どんどん変化を続けて、その変化にますます加速度が加わるのがこれからの世の中です。

そう考えると、いかなる技術にたずさわる人であろうとも、技術者くらい忙しく、努力を要求される職業はないといえましょう。いまの技術を保つだけでも、かなりの努力が必要ですが、それに加えて明日の技術に備えて、常に勉強をしなければなりません。

昨日の技術にのりおけないように追いかけるのでは意味はない。常に新しい技術に挑戦し、苦悶するところにこそ、技術者としての生甲斐があると思うのです。